日本語教育実践研究（9）

－「総合活動型日本語教育」の実践－

細川　英雄

この実践研究は、「総合活動型日本語教育」実践研究として位置づけられ、早稲田大学日本語研究教育センター別科日本語専修課程のなかの「総合3－6A」を実習クラスとし、その実習を踏まえつつ、「私にとって総合活動型日本語教育とは何か」についてレポートを書くという活動を展開しました。

このような実践研究を実施するのは、学習としての実践と教育としての実践について、それぞれが考えてみようという試みです。自分の「考えていること」を明確につかみ、他者に伝え、その他者と具体的な人間関係を形成する力が、コミュニケーション能力だとするならば、教師自身もまた、そのような問題について考える必要があるでしょう。

ここでは、まず「総合活動型日本語教育」への自分の立場を述べ、その動機をもとに、関係者との深い対話を行い、その結果を踏まえて、自分の結論を出すという活動です。

この過程で、参加者は、日本語教育のさまざまな立場に出会い、その立場とのインターアクションを経て、やがて自分の立場を形成するにいたります。

今回は、6名の参加登録者のうち、ボランティアを含む参加者全員の相互推薦により3名のレポートを掲載しましたが、この 3 編のレポートには、上記で述べた葛藤のプロセスが見事に描かれています。いずれも甲乙がつけがたく、1 編に選ぶことが困難だったため、それぞれに縮小版を作成してもらい、何とか掲載にこぎつけました。予定の枚数を大幅に過ぎてしまったことをお詫びします。なお、完全版は、9 月末発行の「言語文化教育研究」創刊号(言語文化教育研究室編)に掲載されますので、そちらをご参照ください。

「実践研究とは何か」は、日本語教育を考えるものにとって不可避の課題です。だからこそ、今後も、実践と研究の関係を問い直すことが必要なように思われます。そのためには、実践と何か、研究とは何か、という問いをもう一度それぞれが考え、議論する場が不可欠でしょう。今回の失敗を恐れずそれぞれの実践を相互に鍛えていく学びの場を提供したいと考えています。自らの実践の中から生み出した、さまざまな発見と学びの場への、多くの院生諸君が積極的に参加され、実践と研究をめぐる、さまざまな活発な議論の巻き起こることを期待したいと思います。

（ホソカワ　ヒデオ・日本語教育研究科教授　hosokawa@waseda.jp）